

つなぐ

板金や鉄骨など溶接加工を生業とする企業は数知れない。世代を超え受け継がれる技術はどれも確かなものばかり。競合ひしめく中、持ち味を生かしどう未来へつないでいくのか。匠たちの挑戦が新たな息吹をもたらす。(中野裕介、敬称略)

「想いを共につくり、加工や精密板金を手絆を育む」。葵製作 掛ける総合板金加工業所(東京都八王子市)として基盤を固めてきでは、事務所に入るや。ものづくりのこだ額縁に収まった経営管理わり、念入りな仕事に念が来訪者を出迎え徹する現場の強みを生る。2014年、社長かすべく、長谷川はさの長谷川薫が就任時にらなる伸び代を求め取りまとめた。

会社の雰囲気 どう伝えるか

1971年に父で現会長の住住紀一が創業以来、大型筐体の製造

報告信に目を向ける。昨年11月に開設したウェブで架台フレーム

葵製作所 ① 架台フレーム発注システム



閲覧者が困らないよう随所にヘルプを配置

心配り、 惜しまず 使い勝手の精度追求

引で顔が見える仕入れ先や顧客ばかり。ウェブサイトの対象は不特定多数に広がる。知られざる閲覧者にどう会社の雰囲気や自分たちが大切にすることを伝えるのか。そんな長谷川の思いをくみ、「やるからいをくみ、」やるからには、しっかりとした環

専門家が、とりわ度が高くなれば、操作受け管理・運用するの難易度も上がる。そ人、工場で製作する人、れでいて対面ではなく三方良しの計算式を編成、板金インターネット。手段み出した。

「ものづくり」という共通の舞台。だからこがすべてをつかさどる重みを感じながら作業を続けた。「見たい人しか見ないかもしれないけれど、誰かが分かんなくなったときに認めるように」と随所にヘルプを配置し

長谷川は画面の情報が多すぎて、改善点の修正を繰り返したりする中で、使い勝手の精度を追求した。

もその一つ。長谷川が社長就任から間もない頃、初めて展示会にブースを出した縁で知り合った同業者のウェブサイトに共感したのがきっかけだった。

「架台フレームに特化した内容で立ち上げは、いずれも長年の取

「たい」。脳裏をよぎった率直な思いをサイトにの運営責任者に直談判したところ、「どうぞ当たら

境を整えよう」と、夫り、表計算のソフトやで常務の長谷川充がシステム会社との調整に当たった。

「見たい人しか見ないかもしれないけれど、誰かが分かんなくなったときに認めるように」と随所にヘルプを配置し

「架台の穴にも小さいもの」と新たなつながり、開りの出現を静かに見守られるところと開ける。「今までもこれか

「架台の穴にも小さいもの」と新たなつながり、開りの出現を静かに見守られるところと開ける。「今までもこれか

些細なことほど注意を

「架台フレームに特化した内容で立ち上げは、いずれも長年の取

長谷川がやり取りする相手はプログラムの発注システムは自由に入力する人、それを

